2022年度学校評価（慶應義塾高等学校）

本校の教育理念	学問の修得に基づいた「独立自尊」の精神を育て、気品と智徳を備えた生徒を育成することを目標とする。

本校の特色	本校は、創立者福澤諭吉の精神に基づき、小学校から大学に至る一貫教育において、中等教育の一画を担うものである。従って、在校生が慶應義塾大学へ進学することを前提として教育方針は定められる。また、本校は、大学と隣接しており、カリキュラムあるいはクラブ活動などにおいて、大学との密接な連携がなされる。一貫教育校として、大学そして小・中学校との連携は学校教育の全ての面に関わるもので、今回の学校評価においては、特別の項目として取り上げてはいないが、個々の項目にその要素が含まれる。

学校評価の経緯と今年度の評価対象	本校では、平成２０年９月に初めて学校評価委員会を設置した。今年度は教育活動（必修科目・選択科目）、特別教育活動（クラブ活動・生徒会）、安全管理、運営（図書）、学校いじめ防止方針に基づく取組の実施状況について点検・評価を行う。達成度については担当者判断、または生徒によるアンケートを実施し、Ａ～Ｄ段階で表示する。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
教育活動					
必修科目	国語 読解および表現活動を中心に授業を展開し、論理的思考力、表現力、語彙力の向上を図る。古典の学習を通じて、伝統文化の本質および古典を学ぶ現代的意義を体得できるようにする。	幅広い時代の多様な文章に触れる。読解の解説にとどまらず、発展的に考え、表現する機会を設け、理解が深まるよう導く。	年間を通して対面授業であったため、教室でのグループワークを少しずつ再開することができた。 多様な文章を読ませ、Teamsを活用した表現・意見交換・研究発表にも力を入れた。	B	発表・意見交換の機会を一層充実させ、考え・表現する力を伸ばす。 Teamsを用いた高度な活動の可能性を模索し、双方向の授業を目指す。 今年度から始まっている新カリキュラムに的確に対応する。
	地理歴史 現代的諸課題の形成に関わる歴史的、地理的事象について認識を深め、その解決に必要な資質、能力を養う。	資料を効果的に用いて、幅広い知識・多面的な思考力を習得させるとともに、生徒の主体的な学習活動を促す。「地理的・歴史的見方・考え方」に留意する。	様々な資料を用いて、歴史学、地理学のエッセンスを伝えることができた。試験においても思考力を問うことができた。	A	授業時間数に限りがあるなかで、扱う内容の取捨選択をせざるを得なかった。評価について、教授、学習の双方に資するあり方を模索する必要がある。
	公民 政治・経済・法律・倫理・哲学といった幅広い分野の中で、深い知識と教養を身につけることを目的とする。	知識の習得に特化することなく、生徒との双方向のコミュニケーションをとりながら授業を展開していく。	コロナ禍の中、旧カリキュラムの現代社会のノウハウを生かしながら、概ね取組目標は達成できたと思われる。	B	コロナ禍における遠隔授業のノウハウをうまく利用しながら、取組目標を達成することが期待される。
	数学 高等学校数学の基礎となる内容から高度な内容まで、幅広く取り扱い、思考力を鍛える。	演習時間を多く取り入れ、自らが手を動かすことで理解が深まることを実感させる。	「そもそも数学に興味が持てない」「勉強しているのに結果が出ない」という生徒がいる以上、十分に達成したとは言えないと考える。	B	授業の際の生徒の反応・試験の答案等を省みて、各担当者が試行錯誤するしかないであろう。また教員自らが常に学ぶ姿勢を持ち続けることも大事であろう。
	理科 幅広い科学の知識を身につけ、科学的な思考法を習得し、身近な現象が科学と密接に関係していることを理解する。	授業を通して基礎知識の定着を図り、可能な範囲で体験的な実験、観察等を行うことにより思考や理解を深める。	講義・実験・演習を三位一体として、基本的な内容から応用の範囲まで理解を深めることができた。	A	MS Teamsをより活用して、遠隔授業で得られたノウハウも活かしながら、より充実した対面授業の在り方を模索していく。
	保健体育 身体活動を通じ、運動やスポーツの技能を高め、将来の健康的な生活習慣の礎を築く。健康について正しい知識を学習する。	個人・集団スポーツを偏りなく授業に配分する。BLS教育を通じ、「命」の尊さを学習する。	各生徒が知識と技能を十分に習得し、学習効果として思考、判断、表現ができるようになった。	A	本年度に達成した学習効果に加え、各単元で生徒自身が更に主体的に学習に取り組む力を育む事が出来るように授業展開を工夫する。
	芸術 個性豊かな表現力と幅広い知識や鑑賞能力を伸ばす。	基礎的な表現方法の実習と鑑賞の授業をバランス良く取り入れ、芸術的感性を高める。	生徒の芸術に対する関心や創作意欲を高めるという点において概ね目標は達成できた。	A	引き続き芸術への理解が深まるよう、高いレベルの表現を追求させたい。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
必修科目	外国語 英語 4技能（聞く・話す・読む・書く）をバランスよく引き伸ばしながら、多言語・多文化への理解を深める。	語彙・文法事項の習得をしながら、様々な言語活動の機会を多く提供する。	LMSやTAの活用により、授業内で生徒に言語運用を促すことができた。	A	新カリキュラムの導入に伴う新しい英語活動等の検討を継続したい。
	第二外国語 基本的な文法、発音から始めて、最終的には読む・書く・聞く・話すの4技能の総合力をつけさせる。 それぞれの言語を通して他文化への理解を深める。	２年次にドイツ語・フランス語・中国語の3科目を設置する。 全くの初心者からのスタートであることを前提に始め、３年次での学習にも繋げる。	生徒のレベル差が見られる部分もあったが、４技能を意識したバランスの良い授業を展開することができた。	B	①定期的な発音のチェックを行い、忘れないようにさせる。 ②リスニング練習の回数を増やす。 ③実践の機会をさらに増やす。
	家庭 今年度は該当なし。	今年度は該当なし。	今年度は該当なし。		今年度は該当なし。
	情報 生徒間の既習内容の差が大きいことが予想されるプログラミングに関して、どの生徒にもフィットした学習となるようにする。	自学自習型の教材を取り入れるとともに、チーム・ティーチングによるきめ細かなサポートを行う。	おおむね想定したとおりの授業を展開できたが、初心者や上級者への対応には不十分なところがあった。	B	自学自習型の教材を、初心者・上級者の目線からブラッシュアップして、どの生徒にもよりフィットした学習となるようにしたい。
選択科目	・2年生においては、選択必修科目として、第2外国語3科目（ドイツ語Ⅰ・フランス語Ⅰ・中国語Ⅰ）の中から1科目を履修することになっている。 ・3年生において、医学部・理工学部を志望する者は12単位、それ以外の者は9単位。志望する学部によって履修すべき指定科目がある。 ・また、3年生の社会では、日本史B・地理Bのいずれか1科目を選択することになっている。				
	国語 必修の授業では扱いにくい発展的な内容の教材に取り組ませることを通じて、言葉や伝統文化に対する探求心をより一層高める。	担当者の専門性を生かして、高度な作品を読み込む。自分で課題を設定し、思索することをとおして、実感を伴った理解につなげる。	具体的な方策に基づいて生徒の知的好奇心を刺激し、探究心を高めることができた。	A	引き続き高度な内容を扱い、表面的な理解に留まることなく、本質的な部分に迫る授業を目指す。
	社会 高校最終学年として、政治・経済・法律・歴史、各分野の理解を深め、思考力を高める。学部選択の一助となることを目的とする。	各分野において、大学での継続を意識して授業を構成する。具体的には高大一貫講座をはじめとする大学との連携を図った授業を展開する。	コロナがひと段落ついた感あり、高大連携の取り組みが徐々に進み始めた。法律入門では裁判員制度についての講義を行いメディアでも取り上げられた。	B	コロナ禍の産物として、遠隔による講義が定着しつつある。学部説明会の内容を授業で扱うなどリモートの長所をうまく利用しながら、取組目標を達成することが今後の課題と言える。
	数学 基礎学力を充実させ、論理的思考力を育む。大学進学後に要求される高度な思考力、迅速かつ正確な計算力を養成する。	3年次に4科目を設置する。大学の授業に円滑につながるよう、授業を工夫する。	理工学部より、内部進学者が1年時の数学で苦労しているとの話があった。従って「達成状況」は十分であるとは言えないであろう。	B	大学進学以降も数学を必要とする生徒が、自ら進んで数学を学びたくなるような知的好奇心を湧かせる授業を各担当者が工夫するしかないであろう。
	理科 必修科目を通じて修得した知識、技能をより高め、専門性の高い環境で活躍できる基礎を醸成する。	より専門性の高い実習を行い、また問題演習なども扱うことで、深い現象理解と高い解法スキルを養う。	講義・実験・演習を三位一体として、基本的な内容から応用の範囲まで理解を深めることができた。	A	MS Teamsをより活用して、遠隔授業で得られたノウハウも活かしながら、より充実した対面授業の在り方を模索していく。
	芸術 １・２年次に培った経験を生かし、創意工夫をこらしたより高度な芸術表現を追求する。	より高度な表現のために実技を中心に、音楽に3科目、美術に4科目を設置する。	生徒各々が積極的に授業に参加し、達成目標に近づくことが出来た。	A	引き続き、芸術への理解が深まるよう、より高いレベルの表現を追求させる。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
選択科目	英語 言語にまつわる様々な分野の問題・課題に対して生徒の関心・理解を深める。またそれを表現する方法を身に着ける。	様々な言語材料に触れながら、言語・文化に対する理解を深め、考察する力を育む。 また自分の考えを学問的に表現する手法を身に着ける。	幅広い活動の実施によって生徒の確実な上達を実現することができた。	A	ITツールの活躍の検討を継続したい。
	第二外国語 「読む・書く・聞く・話す」の4技能をバランスよく伸ばし、総合力を高める中で、異文化理解も深めていく。また、大学での学習にも繋げていく。	3年次にドイツ語・フランス語・中国語の3科目を設置する。2年次での学習を振り返りながら、より実践的なコミュニケーション活動なども行い、向上心と意欲を高める。	生徒によって達成度は様々であるが、取組目標は概ね達成できた。	B	生徒がよりアウトプットをできるようにするため、授業展開など工夫・改善をしていきたい。
	家庭 日本の文化を学ぶことで物を大切にする生活様式を理解し、環境に配慮した消費生活が営めるよう意識を高める。	和服、和食、和室等について取りあげ、実習や体験、映像視聴、発表、意見交換を通じてこれからの消費生活について考えさせる。	実習や体験を通じて日本の文化を理解し、個々の生活を振り返ると共に、今後の消費生活の在り方について考えることができた。	A	次年度は実施しないが、様々な場面で環境について意識させ、適切な消費生活が営めるよう指導していきたい。
	情報 生徒にとってややハードルが高い内容を含む「統計」分野の理解度を向上させる。	実習時間を十分に確保することで、理解が進むように配慮する。	実習時間を前年度までより多くとることができたが、十分とはいえなかった。	B	授業内容の精選と実習教材のブラッシュアップをさらに進め、理解がより進むようにしたい。
特別教育活動					
クラブ活動・生徒会	クラブ活動 クラブ活動を通じて、生徒の健全な心身の育成を目指す。新型コロナ感染防止対策で活動の制約のある中、充実した活動を心がける。活動中の安全管理を徹底する。各クラブの活動への経済的支援を可能な範囲で行う。 生徒会活動 一貫教育校の生徒会との交流をより充実させる。卒業生との連携をより深いものとする。	各クラブの代表者で構成されるキャプテン・マネージャー会議や、各クラブに携わっている監督やコーチに対しての研修ビデオを作成し、安全管理に関する啓発を行う。全国大会出場支援募金を行い、出場する生徒の経済的負担を補う。 一貫教育校の生徒会役員を集めて行う招待会議を通じて、積極的に交流を図る。生徒会主催の学部説明会に卒業生講師の招聘を行う。	年間を通じ、感染防止対策を徹底しながら、活動を継続することができた。活動中の安全管理を徹底するため、熱中症講習会を、キャプテン・マネージャー会議などで実施した。経済的負担を補うため、全国大会支援基金による支援を本年も実施した。 １年間を通じ充実した活動を行うことができた。球技大会・運動会・森林保全・日吉祭・招待会議などの行事を再開することができた。	A	安全管理を徹底させるために、指導者に対して安全対策講習会の開催を、対面・オンラインで開催したい。生徒に対しては、引き続きキャプテン・マネージャー会議などを通じて熱中症・BLSなどの講習を実施したい。また、経済的負担を補うため、保護者会からのクラブ活動補助、全国大会支援基金による支援を充実させたい。 コロナの影響による活動休止が響いて、昨年度は生徒間で、生徒会主催の学校行事の引継ぎが思うようにできなかったため、アフターコロナの新しい形での生徒会活動の構築を進めていきたい。
安全管理					
設備	・教職員の協力を得て、定期的に教育施設・設備の保守・点検を行い、事故防止や安全対策を図る。 ・生徒の動線に目を配りながら、安全面に配慮する。 ・校内の老朽化した部分の改修を行う。不要設備の撤去を行う。 ・必要な設備の新設を行う。	・定期的に各教育施設の安全点検を行う。必要に応じて設備の修繕・改善を行う。 ・生徒会役員の協力を得ながら、生徒の目を通じて危険個所の点検を行う。 ・第一校舎の外壁の修繕を行う。一般教室の換気設備の増設を行う。 ・熱中症対策としてウォーターサーバーの新設を行う。	・部室棟を中心に大掃除、廃棄物処理、点検を実施し、危険個所の発見に努めた。 ・第一校舎の外壁の修繕（2年目）、一般教室の換気設備の増設および塗装を行った。 ・冷水機のボトル専用への転用およびウォーターサーバーの新設を行った。	A	・教育施設・設備の保守・点検を定期的に行う。 ・生徒会役員の協力を得ながら、生徒の目を通じての危険個所の発見を継続して行う。 ・校内の老朽化した部分の修繕・改修を行う。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
保健衛生	・環境衛生調査を継続して行い、生徒の快適な学校生活のための環境を整備する。 ・保健衛生に関する情報を担任や生徒に適宜提供する。 ・新型コロナウイルス感染症への対応を適切に行う。	・年2回、環境衛生調査を継続して実施する。 ・関係スタッフと相互に協力し、迅速に教室環境の充実を図る。 ・一般教室の換気設備を増設し環境改善を図る。 ・校医・保健師と連携し、有効な感染症対策を実施する。 ・食物アレルギー情報を担任と共有し、緊急時対応を準備する。 ・マスク着用、黙食、換気の徹底を図る。感染者・濃厚接触者への迅速な対応とケアに留意する。	・環境衛生調査を２回実施した。 ・一般教室の換気設備を増設し環境改善を行った。 ・食物アレルギー情報を担任と共有し、研修への参加、啓発を行った。 ・新型コロナウイルス感染症対策として黙食、教室の換気対策を呼び掛け、発生した感染について迅速に対応した。	A	・環境調査を引き続き実施していく。 ・教員向けに食物アレルギーとエピペン使用の講習会を開催する。 ・新型コロナウイルス感染症への対策・対応を引き続き実施する。
危機管理	・生徒・教職員が安全で安心した学校生活を送ることができるよう、安全教育を推進し、安全管理を徹底する。 ・非常時の意思決定の方法について検討する。 ・非常事態が起こる前に、想定される対応策を準備する。	・生徒・教職員対象のBLS講習の実施。 ・緊急時一斉連絡システムの整備と活用。 ・新型コロナウイルス感染症対策を徹底し、学校運営の平常化を図る。 ・９月に備品の補充点検の実施。 ・南海地震クラスの大災害が発生したときにどのように対応すべきか、校内で議論する。 ・アレルギー対応の非常食を用意する。 ・備蓄場所を再検討する。	・緊急時一斉連絡システムで非常時の連絡を行った。 ・新型コロナウイルス感染症対策を徹底した。 ・非常時の対応に関するガイドを改定した。 ・アレルギー対応の非常食を備蓄する設備のための予算建てを行った。	A	・一斉連絡システムを更新し、保護者向けの情報発信を強化する。 ・新型コロナウイルス感染症対策を万全にする。 ・アレルギー対応の非常食を備蓄する設備を新設する。
運営					
図書	過去の展示企画の経験を活かし、新たな視点で蔵書の構築を行い生徒の利用促進を目指す。図書館システムについて、今年度から既存のサーバからクラウドへ移行し管理を合理化した。実務の運用を軌道に乗せる。	本校の「卒業生著作コーナー」を新設、大学学部コーナーを拡充するなど、生徒の進路の参考になる内容で書架を工夫する。図書館システムのクラウド化に伴うオペレーションの変化に対応する。	展示企画は、各種講演会と連携し利用の促進に繋いだ。また、大学教員著作の学部からの寄贈を所蔵した。図書館システムのクラウド化一年目は、問題点を解決しつつ概ね軌道に乗せた。	A	アフターコロナを見据えたサービスを再確認し、図書室としてより快適な環境を目指す。これまで紙媒体で提供していた資料について、ポータルサイトやTeamsへの掲載を心がけ、時代の傾向に合った伝達手段を考慮する。図書館著作権処理済みDVDの予算を申請した。

学校いじめ防止基本方針に基づく取組 の実施状況					
いじめ防止対策	・生徒の声を受け止め、しっかり向き合う。 ・迅速に、組織的に対応する。 ・保護者、関係機関との連携を図る。 ・教員向け講座を実施し、教員の対応のスキルアップを図る。 ・インターネット上のいじめへの対応を検討する。	・担任による生徒・保護者との面談を実施する。 ・ホームルーム、部活動を通して望ましい人間関係の構築を進める。 ・いじめ事案に対し、いじめ防止対策委員会を中心とした対応を行う。 ・あらゆる情報に迅速に対応する。 ・相談室の利用を促進するための保護者向けの講演会を実施する。 ・一貫校いじめ問題連絡会で情報を共有する。 ・教員向け講座を実施する。 ・生徒に注意喚起を行う。 ・教員の講習会参加を促す。	・生徒、保護者との面談を必要に応じて実施した。 ・保護者、生徒に相談室の積極的な利用を促し、相談室と連携して対応した。 ・保護者向け講座を２回、教員向け講座を３回実施した。 ・一貫校いじめ問題連絡会で情報を共有した。 ・SNS利用に関する注意事項を4月に配付し注意を喚起した。	B	・生徒、保護者との面談を積極的に実施するように機会を捉えて促す。 ・保護者向け講演会を実施する。 ・教員向け講座を開催し、幅広い参加を募る。 ・あらゆる情報に迅速に対応する。